

春 haru

河村 恵



よく見かける大仏がいる。
いつもと一本違う道を歩いていたら見かけたのである。
台風一過の日には、ほうきで落ち葉を掃いていた。

目が合ったので、軽く頭を下げてみると、
「おはようございます」
と言う。大仏の割りに早口だ。
「おはようございます」
「いい天気ですな」
「ええ」
「気をつけて行ってらっしゃい」
戸惑う私に大仏らしく柔和な表情を浮かべた。
「ってきます」
そう言いながら手を合わせそうになる。

その日から、毎朝会うようになった。
先週は、家具を運び出していた。
引越しかな？ と思っていると、
「部屋の模様替えをしています」
首からタオルをかけていて、そのタオルで額の汗を拭いたりなんかしていて、大仏らしくない。
「模様替え、いいですね」
「好きなんですよ」
桐箆筒やちゃぶ台、本棚などが庭に運び出されていた。年期の入った黒光りする家具たちが気持ちよさそうに日光浴していた。

昨日は電車の中で見かけた。

山手線に乗ると、ひときわ座高の高い人がいると思ったら、大仏だった。

あの頭を見てビクリとした。

周囲の人々は、いつものラッシュ時らしく、顔をゆがめていた。

次の駅で腰の曲がった小柄な女性が乗ってきた。

目の前の男は寝たふりをしている。

大仏はかすかな金属音を立てて振り返り素早く立ち上がった。

「どうぞ、おかけなさい」

大仏は二人分くらいの座席スペースを女性に提供した。

「ありがたや」

と言って女性は座ったが、まだ一人分くらいが空いていた。

「ありがたや」

近くに立っていた男がそこに座った。

嬉しそうにうなづいていて、いかにも大仏らしい。

どこに行くのだろうと気にしていると、3つ先の駅で下車していく。

右手には、不似合いな水玉模様の小さな傘を持っている。

跡をつけていくと、駅員と何か話している。

「忘れ物なのだがね、この傘。きっと持ち主が捜しているだろうから」

「ええ。外回りの、10両目のドアの横に、ええ、こう立てかけてあって」

駅員は大仏から傘を丁寧に受け取り、一呼吸置いてからサインを求められるが、

「いや、そんな大した者じゃないから」

などと言って、照れ笑いをする。

4月に入った。

最近見ないと思っていたら、公園でお花見をしていた。

「お久しぶりですね」

私は頭を下げると、

「まあまあ、座りなさい」

相変わらず早口で言う。

プラスチックの透明のコップを持たされ、ビールを注いでくる。

泡とビールが3:7で、注ぎ方もうまいなあと関心していると、

「サクラに乾杯！」

大仏はひととき大きな声で言い、コップを強く合わせた。

豪快に飲み干していく。

つまみをつまんでいるかと思ったら、今度はおにぎりとかから揚げ、煮物にたくあんを入れたタッパーを広げた。

「あなたが作ったんですか？」

と訊くと、大仏は照れ笑いをした。

「から揚げとたくあんは、東口商店街の惣菜屋で買ってきました」

「おにぎり、おいしそうですね」

「食べてください。鮭とたらこ梅です。」

手にとると、おにぎりは三角と言うより、いびつな丸型をしている。

どこかの寺の説教で、丸はとてもよい形だと聞いたことを思い出した。

「おいしいですね。なつかしい味がします。」

「これが大仏の味です。」

大仏は梅のおにぎりを食べていた。

「おお、すっばい」

と呟いたりしている。

「いつも紀州の蜂蜜漬けの梅干を食べていたんですがね、きらしてしまって。昨日慌てて近くのスーパーで捜したがなくて」

大仏は庶民的な生活をしているようだった。

「蜂蜜漬けの梅干ですか？」

「ええ。みなさん、珍しがるんですがね」

いつの間にか、酒を注がれていた。

風が吹くと、はらはらと桜が舞い降りてきた。

「浮かびましたね」

「いいことありますね」

花びら入りの酒を飲んだ。

酔いが回ってくると、大仏は声がどんどん大きくなっていく。

もともと早口なので、呂律が回らなくなるのも早いようだ。

「そろそろ、ですか」

桜の夜のライトアップが始まった。

夜桜はきれい過ぎて少し怖さを感じる。

「桜、きれいですね」

「まるで女性のようにと思いませんか？」

「女性？」

「ええ。昼間はかわいらしく見えるが、夜になると美しさにグッと磨きがかかって、時には怖さを感じさせる」

大仏が女性についてこんなことを考えているとは意外でおもしろかった。

風が冷たくなってきた。

大仏が頭に手をやり、たじろぎ始めた。

「どうしました？」

「頭のでこぼこが、なくなってしまいました」

私は笑いながら触ってみる。

大仏の頭はスルスルとしていて、確かになくなっていた。

「そろそろ、帰りませんか」

「そうですね」

「楽しかったです。また」

大仏は手早くタッパーやビン、シートを片付けて駅のほうに帰っていった。

翌週、東口商店街で大仏らしい姿を見つけたが、頭のでこぼこがなく、一回り小さく見えたので確信がもてなかった。

それきり、大仏とは会わなかった。

春

<http://p.booklog.jp/book/69210>

著者：河村 恵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/p-lily/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69210>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69210>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ